

新入生のみなさんへ

青空が冴え渡って見えるこの日、本来であれば相見えてみなさんをお祝いする大切な一日ですが、お祝いの言葉をこのように文書としてお伝えすることになり、本心から残念に思っています。

今日、新しく学部学生、大学院学生のみなさんを東京家政学院大学の構成員としてお迎えします。新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

新入生のご家族、関係者のみなさん、おめでとうございます。

わたしたちは新型コロナウイルス感染拡大の最中にいます。やがて感染拡大が「収束」としても、私たちのこれからの世界は今日とは異なり、これまでの私たちの環境が再現される訳ではありません。ことに若いみなさんは、日々感染拡大を伝える情報の背後にある大きな「転換」に向き合って、これからの、今日とは異なる社会の中で生きていくこととなります。

だからこそ、みなさんがその「転換」を新しい世界創造の契機とし、今日とは異なる社会で生きる「力」を蓄えるために、真剣に考え、学び、実行する日々を本学で過ごして欲しい、と願っています。

今日、私はみなさんに、私たちが今歩んでいる二つの「重なり合う道」についてお話しします。

ひとつは、私たちが今歩んでいる道は「またふたたびの道」だということです。

現在のオランダに当たる「ブラバント公国」の画家、16世紀に生きたP.ブリューゲルは、市井の人々の暮らしや遊びを細々描いた作品でみなさんもお存知と思います。彼の絵や版画には「旧約聖書」に題材を取った「バベルの塔」のような風刺的、暗示的な作品も多くあります。私は彼の作品の中でも、時代の記憶を描いた一枚の「暗い絵」、スペインのプラド美術館で観た「死の勝利」に関心を持っていました。印象が強いのは、その絵が生きて苦しむ、恐怖の中にいる人々の姿を描いているからですが、しかしそれがよくある宗教上の教訓画にとどまらず、ペストの苦しみや恐怖からどう生きるかを問うように思えたからでした。

もうひとつ。私たちは「戻れない道」を歩んでいる、ということです。

ブリューゲルの描いた16世紀のペスト流行だけではなく、もっと近年ではスペイン風邪、アジア風邪、香港風邪、エボラ出血熱、SARS、MERSなどなど、人間は多くの感染症とつい最近までたたかい続けて来ています。

スペイン風邪が大正の日本を襲った時、「君死にたまふことなかれ」でみなさんもお存知の与謝野晶子は、彼女の寄稿文「感冒の床から」（1918年）でこう書いています。

「この風邪の伝染性の急激なものには実に驚かれます。…東京でも大阪でもこの風邪から急性肺炎を起して死ぬ人の多いのは、新聞に死亡広告が殖えたのでも想像することが出来ます」といい、この文の冒頭で「今度の風邪は世界全体に流行って居るのだと云ひます。風邪までが交通機関の発達に伴って世界的になりました」と指摘しています。*

現在の新型コロナウイルス感染が国境を超えて伝播するように、感染症の歴史は人々が移動し、交流することによって世界を短時間で巻き込むことを繰り返して来ました。だから、なおさら現代の潮流であるグローバル化はウイルスにとって「好都合」だったともいえます。

では「鎖国」をすれば良いのか、というとそうではありません。「感染源」を問い、その国や感染した人々を責めれば良い、という訳でもありません。私たちが生きていく上で、どのように感染症とたたかい、あるいは制御していくのかを世界がひとつになって取り組む、そのことこそグローバルを謳うこれからの時代、より多くの人々の命を救う手掛かりとなるからです。

では、この二つの「重なり合う道」は私たちに何を教えようとしているのか？

収束はいまだ見えない先のことですが、「鎖国」に匹敵する、かつての流行時にあった排他的な意識や行動ではなく、今、私たち一人ひとりの理性的な判断が求められる、正しい情報を選別し、理知的かつ自主的に行動できる次の時代の価値観、「自分たちの姿」を創れということだと思います。

その好例である“social distancing”は今回の感染予防で始まったことではありませんが、イタリアやスペインからのTV映像を観て、あれほど「自分は」に拘る人々が、他者と同じように間隔を空け、スーパー入口に整然と並んでいる光景は、目的のために人々が自分の判断で“social distancing”を実行し、「自分は」とはまったく異なる価値観を共有したことを示しています。

“social distancing”の「離れる」は、決して「他者を排除」と同義ではありません。感染のリスクが接触にあるのなら、離れることは極めて単純な、合理的な行為に他なりません。だから、今、三つの「密」、つまり「密集」、「密閉」、「密接」を避けよとの自粛要請があり、本学では加えてみなさんに「感染しない」、「感染させない」行動を呼びかけている訳です。

異質な、「私」とは違う他者を排除しない、は実は簡単ではないかも知れませんが、しかし、現在の新型コロナウイルス感染の最中で、私たちがもっとも注視すべきはそのことであり、また感染拡大防止の最前線に立つ人々への敬意を抱き、自分の判断で率先して協力することだと思います。

大学がみなさんに対して、今、すべきこと。それはみなさんの安全を守ることに他なりません。同時に、みなさんの学ぶ機会を、この状況の中でどう創っていくのかです。私たち教職員にとっては試練が重なります。もちろん、みなさんにとっても同じです。

しかし、そこを突き抜け、本学のキャンパスでみなさんにお会いした時、みなさんが新しい「自分たちの姿」を創ることの後押しに、私たち教職員は全力を挙げます。

本学の二つの特徴を持ったキャンパスで、みなさんにお会いする日を楽しみにしています。
ご入学、本当におめでとうございます。

2020年（平成2年）4月3日（金）
東京家政学院大学学長 廣江 彰

*「感冒の床から」(『與謝野明子評論著作集 第18巻』、2002年11月) p.172。なお、初出は「横濱貿易新報」1918年11月3日。また、引用文中の旧字体は新字体に改めたが、平仮名は原文のまま。